

( 続紙 1 )

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	真鍋 公希
論文題目	円谷英二の「卓越化」——特撮の社会学		
(論文内容の要旨)			
<p>本稿は、フランスの社会学者P. Bourdieuの場の理論に依拠して、1930～60年代に活躍した特撮技師・円谷英二について考察するものである。本稿は全体で8章構成(付録を除く)となっている。</p> <p>第1章と第2章は導入部分にあたり、第1章で特撮・円谷論における問題設定を、第2章では社会学における理論的な問題設定を行う。第1章では、既存の特撮論・円谷論を概観したのち、(1)既存の議論とは異なる統一的な円谷解釈の提示、(2)円谷を「映画の作者」として扱うことを可能にした条件の解明、(3)円谷が「特撮の神様」として聖化される過程の解明、という三つの課題を示す。第2章では、本稿の分析視座となるBourdieuの場の理論の基本概念を紹介するとともに、(a)「芸術と金銭の対立」とは異なる構造下における卓越化のプロセスの解明、(b)知覚規範の形成メカニズムの再検討、の二つを理論的な問題として提起する。</p> <p>第3章では、円谷の経歴を確認したうえで、執筆記事の傾向変化を量的内容分析によって検討した。その結果、円谷の活動時期を、映画産業に参入してから『ゴジラ』が成功するまでの前期(～1954年)、『ゴジラ』の成功から円谷特技プロダクションを設立するまでの中期(1955～62年)、円谷プロを設立してから死去するまでの後期(1963～70年)の三つに区分できることが明らかとなった。この結果を踏まえ、第4章で前期、第5章で中期、第6章で後期の円谷の実践をそれぞれ分析した。</p> <p>第4章では、円谷が執筆記事で主張していた「特撮の意義」と「演出効果の重視」という二つの論点から、円谷が実用主義的なハビトゥス、すなわち特撮という技術によって新たな映像表現・演出効果の拡大をもつばら追求するような性向を身体化していたことを指摘した。また、前期の円谷が経験した他の制作者との対立を、1930年代の映画場の構造との関係で考察した。</p> <p>第5章では、まず『ゴジラ』の成功を転機として、円谷が執筆記事上で作者として自己呈示をするようになり、同時に作品制作に関与できる余地も広がったことを指摘した(特撮の自立化)。円谷はこのチャンスを的確に活用し、観客のあいだに作者イメージを形成することに成功した。また円谷は、『ゴジラ』の商業的成功、とりわけアメリカ市場での成功を「技術への評価」へと読み替えた。円谷は獲得した経済資本の意味を変化させることで、「技術に対する評価」という新しい象徴資本を確立したのである。</p> <p>第6章では、映画産業の斜陽化によって怪獣映画の制作を強いられるようになった円谷が、「健全さ」に準拠した記事執筆/作品制作によって、「子どもに夢を与える好々爺」という社会的イメージを構築したことを指摘した。「健全さ」への準拠が卓越化の戦略として機能したのは、エロ・やくざ映画が流行し社会的な批判の対象となっていた当時の映画場の構造ゆえである。こうして円谷は、「子ども向け」作品としてジャンルのヒエラルキーの劣位に置かれる怪獣ものの制作を、積極的な意味をもつものへと反転させ、後期においても象徴資本を獲得することができた。</p> <p>第7章では、円谷の記事執筆/作品制作が当時の観客にどのように受容されたのかについて検討した。技術解説記事の消費と作品の鑑賞とが連関することで、当時の観客は特撮に対する関心を抱き、メタな認識を伴いながら作品を受容していった。また、円谷が技術解説記事を執筆しなくなり、同時に作品も「子ども向け」の傾向が強まった後期には、少</p>			

年マンガ雑誌に掲載された大伴昌司による記事がその変化を補完するとともに、受容者の「オタク」的な欲望を喚起したことを明らかにした。ここから、円谷の実践と1970年代以降の特撮ジャンルの形成の結節点に、大伴による少年マンガ雑誌の記事を位置づけられることが示唆された。

第8章では、以上の分析結果を整理し直し、第1章・第2章で掲げた問いに答えて結論としている。(1)については、前期の分析で指摘された実用主義的なハビトゥスが、統一的な円谷解釈の根幹に位置づけられると結論づけた。このハビトゥスは中期や後期の円谷にも観察でき、これまでは別様に解釈されてきた彼の演出や振る舞いを統一的に解釈できることが示された。(2)については、中期の執筆記事での作者化と、制作された作品における特撮の自立化の二つによって、「映画の作者」としての円谷というイメージが形成されたといえる。(3)については、中期においては空想科学映画の商業的成功を「技術に対する評価」へと読み替えたこと、後期においては「子ども向け」作品制作の意味を「健全さ」への準拠によって反転させたことが、円谷の象徴資本の獲得に寄与したと結論づけた。

この二つの実践は、社会学的な問題としての(a)についての考察でも中心的な位置を占める。中期・後期において円谷が象徴資本を獲得したプロセスは、「経済資本の否認による卓越化」とは異なる「経済資本を担保に新しい象徴資本を創出する卓越化」と呼ぶことができる。この卓越化は、経済資本と象徴資本が一致も対立もしない構造をもつ当時の映画場だからこそ可能になった(当時の映画場の構造については、本稿の付録で数量的分析が示されている)。この卓越化は、大衆文化の領域に場の理論を応用する際のモデルとなると期待できる。

(b)については、第7章で論じた、円谷の技術解説記事が、観客に特撮に対する関心を抱かせ、メタな認識を伴いながら作品を鑑賞する経験を構成していったという指摘が、新しい知覚規範の形成を示しているといえる。この事例は、作家や作品が受容者に知覚規範を押しつけるのではなく、知覚規範が流通や受容の過程での相互行為によって立ち上がることを示唆している。したがって、この円谷のケースは、作家や作品による受容者への知覚規範の「押しつけ」をもっぱら論じたBourdieuが等閑視した部分を補完するものといえる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、フランスの社会学者P. Bourdieuの場の理論に依拠して、1930～60年代に活躍した特撮技師・円谷英二について考察したものである。

本論文の学術的意義は、大きく下記の2点にまとめることができる。

第1に、これまで多くの批評的言説が語られながら、統一的な解釈が存在しなかった円谷について、社会学理論に基づく一貫した学術的視点から、統一的な円谷像を提示したことである。

またそれは、円谷が映画監督ではなく（従来は映画製作の場において従属的な地位に置かれていた）技師でありながら、なぜ「映画の作者」というイメージを獲得できたのか、さらには、映画の場において「特撮の神様」として卓越化しえたのか、という問いに答えることをも可能にした。

統一的な円谷解釈の根幹に位置づけられるのは、前期の円谷の執筆記事から見出された「実用主義的なハビトゥス」、すなわち特撮という技術によって新たな映像表現・演出効果の拡大をもつばら追求するような、身体化された性向である。このハビトゥスは中期や後期の円谷にも観察でき、これまでは別様に解釈されてきた彼の演出や振る舞いを統一的に解釈できることが示された。

また、「映画の作者」としての円谷のイメージの形成は、中期の執筆記事における「作者」イメージの自己呈示と、制作された作品群の成功による「特撮の自立化」の2点によって説明される。さらに、「特撮の神様」としての円谷の卓越化は、中期においては、空想科学映画の商業的成功を「技術に対する評価」へと読み替えたこと、後期においては、映画の場の価値評価において劣位に置かれていた「子ども向け」作品制作の意味を、当時隆盛していたエロ・やくざ映画との対比において、「健全さ」という価値観への準拠によって反転させたことによって可能になったと分析されている。

第2に、Bourdieuの場の理論の精密な読解に基づきながらも、Bourdieu自身が近代芸術の場に見出した「芸術と金銭との対立」構造下における「経済資本の否認による卓越化」とは異なる、映画という大衆文化の場の構造下における卓越化のプロセスを解明し、また、近代芸術とは異なる受容者の知覚規範の形成のメカニズムを明らかにすることにより、Bourdieuの場の理論を拡張・再構築することに寄与した点である。

映画の場における円谷の卓越化（象徴資本の獲得）は、上述のように、空想科学映画の商業的成功を「技術に対する評価」へと読み替えたこと、および「子ども向け」作品の価値を「健全さ」への準拠によって反転させたことによっておこなわれた。このプロセスは、Bourdieuのいう「経済資本の否認による卓越化」とは異なる「経済資本を担保に新しい象徴資本を創出する卓越化」と呼ぶことができる。またこの卓越化は、経済資本と象徴資本が一致も対立もしない構造をもつ当時の映画場だからこそ可能になった。このような卓越化のプロセスは、大衆文化の領域に場の理論を応用する際の1つのモデルとなると期待できる。

特撮作品の受容者の知覚規範の形成は、円谷らの技術解説記事が、観客に特撮に対する関心を抱かせ、「メタな認識」を伴いながら作品を鑑賞する経験を構成していったことによって説明される。このプロセスは、近代芸術のように作家や作品が受容者に知覚規範を押しつけるのではなく、作品の流通や受容の過程での相互行為によって、新たな知覚規範が立ち上がることを示唆している。したがって、この円谷特撮のケースは、作家や作品による受容者への知覚規範の「押しつ

け」をもっぱら論じたBourdieuが等閑視した部分を補完するものといえる。

これら2点の意義は、本論文が、社会学と映画学という2つの学術領域を越境した学際的研究として高く評価できるものであることをも示唆している。以上のように、本論文は専門的かつ独創的な高い価値を有しているが、他方で、下記のような課題の存在も指摘される。

第1に、特撮というジャンルは、日本の大衆文化ないしサブカルチャーにおいて注目される（にもかかわらず、現時点では学術的研究の乏しい）領域のひとつであるが、円谷以降のこのジャンルの形成過程については、1970年代以降の「オタク文化」への接続という観点から簡単に示唆される程度にとどまっている。

第2に、本論文によって提示された、Bourdieuの場の理論を拡張・再構築する可能性は、多様な文化領域への応用によって検証されるべきものと言える。たとえば特撮映像作品というジャンルに限っても、本論文で分析された円谷の卓越化と特撮ジャンルの形成のプロセスが、特殊日本的なものなのか、それとも海外の特撮技師や特撮作品とも共通する普遍的なものなのかといったことは、明らかではない。

そのような未解決の課題の存在は指摘されるものの、これらの課題の解明は、むしろ学位申請者の今後の研究の発展に期するべきものであり、先述した、本論文の有する高い専門的・独創的価値そのものを減じるものではない。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和3年1月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降